

サウジアラビア社会における女性の存在

(株)三井物産戦略研究所 研究フェロー

(財)日本エネルギー経済研究所 客員研究員

榊原 櫻

人口の半分は女性

このところ在リヤドの日本大使館では「(人口の)半分は女性」が、はやり文句、はやり言葉になっているとのことである。これはある日本の女性実業家がサウジアラビアの女性市場に着目したことが大使の耳に入り、始まった現象のようである。サウジでもどの国でも、人口のほぼ半分が女性であることは当たり前である。にもかかわらず、これが我が大使館で、今さらはやり文句になっているということは、これまで、我々がサウジ社会とかかわる場合、女性の存在をほとんど意識してこなかったことを意味している。もちろんこれは日本人に限られることではない。多くの外国人も同様である。つまり、サウジ社会は、男女の社会的な空間が分かれているために、男性だけを相手にすることの多いビジネスやオフィシャルな仕事に携わる普通の外国人の目には女性の姿が見えにくかったのである。

サウジ女性のイメージ

我が国で、サウジ女性のイメージについて質問すると、多くの回答は、髪や顔を隠すベールや体を覆うアバヤと呼ばれる黒いマント、男女隔離・差別、自動車運転の禁止などをあげる。こうしたイメージは女性が社会的に存在感が薄いことを物語るものである。これが、社会における女性の存在を考えない、あるいは結果的に

無視してしまう意識につながっているのかもしれない。

ファイサル国王によるバックアップ

サウジでは、ファイサル第3代国王が1964年の即位後、女子教育を許可し、女学校を設立した。この時代、女性が社会でより広い役割を果たすことが奨励された。1975年にファイサルが暗殺された後を継いだハーリド第4代国王は国政にあまり関心がなく、実際の政治は、ファハド皇太子(後の第5代国王)に委ねられた。開明派として知られたファハド皇太子は、ファイサル時代にもまして広い範囲で改革を進めた。この結果、女性についても70年代後半には東部州やジェッダなどでは、顔までベールで覆うことが徐々に少なくなっていた。敢えて言えば、現在に近い状況になっていた。その当時、ある有力な家族出身の教職にあった女性は、体はアバヤで覆ってはいたが顔は隠しておらず「サウジはゆっくりだけど、着実に変化していつている。女性もいずれ日本のようになる」と誇らしげに語っていたことが思い出される。

1979年にかかったブレーキ

この状況にブレーキがかかったのは、1979年である。この年、イランではイスラム革命が起き、メッカの大モスクが宗教過激派に占拠され、そしてソ連がアフガニスタンに侵攻した。イラ

ン革命は、盤石と思われていたシャー(皇帝)を権力の座から追放し、そのあと成立したシーア派のイスラム政権は、サウジの王制を腐敗しイスラムから逸脱していると攻撃し、イスラム革命を輸出する姿勢を見せた。イスラムの第一の聖地メッカの大モスク占拠は、サウド家による支配の正当性を否定するスンニ派の教条主義・原理主義集団によるものであった。彼らもサウド王家が本来のイスラムから逸脱していると非難した。アフガニスタンでは、イスラム教徒の国がこともあろうに無神論の共産主義者の国、ソ連に蹂躪された。これらの出来事は、すべてサウジの指導層に大きな衝撃を与えた。体制の危機と捉えられた。サウド家の王制を維持する目的で、政府は宗教界との関係を強めた。好むと好まざるとにかかわらず、イスラム色を強めざるを得ない立場に追い込まれたのである。歴史的に見れば、サウド王家による支配は宗教界との連携により成立した。その後は時間の経過とともに、国際社会との接触が増し、政府は近代国家に脱皮することを目指すようになった。それにつれて、社会の宗教色は徐々に薄まってきていた。ところがこの年に起きたこれらの事件は、それを許さなくした。政府の姿勢は内向きになり、イスラム保守派は勢いを増した。オープンになりかけていた社会が改革に後ろ向きになったのである。それまで顔を隠したことがなかったような女性も髪を覆い黒いカバーを用いるようになった。テレビからは女性アナウンサーが消えた。美容院も閉鎖された。女性の社会進出はさらに制限され、自動車運転などもつてのほかとなった。もちろん、男女の隔離が徹底され、社会から女性の姿が見えなくなった。外国人女性にもアバヤ着用が求められるようになった。余談ながら、この時期、在サウジの米大使館、領事館は在留米人女性に対しアバヤを着用しないように呼びかけていた。なお、今ではそのような呼びかけは行われていないが、在

留欧米人女性の中にはアバヤを使用しているも、きちんと全身を覆うのではなく、形ばかりにひっかけるような形をとっている例も見られる。

湾岸戦争後は女性の社会参加が再びスタート

その後、約10年間を経て1990年のイラクによるクウェート侵攻に始まる湾岸戦争が勃発し、多国籍軍がサウジに展開した。多国籍軍に女性兵士が含まれていたことが、サウジ社会に大きな驚きを与えた。良くも悪くもこれが一つのきっかけとなり、サウジ女性の社会進出・参画を求める動きが次第に高まりを見せるようになった。外国人女性兵士が、男性兵士に伍して戦闘に参加するだけでなく、非番の際に顔や髪だけではなく二の腕までも露出してショッピング・モールなどを我が物顔で歩き回る姿は、サウジ社会にいろいろなショックを与えた。もちろん、保守派は眉をひそめた。しかし、政府は次第に、サウジ女性の社会参加を支持するようになり、影響下にあるメディアを通じてその促進に向けて国民の意識改革を図り始めた。

女性とビジネス

あまり知られていないが、女性の社会との関わりについては、ビジネスを中心に議論されることが多い。これはイスラムを始めた預言者ムハンマドの最初の妻のハディージャがビジネスに携わっていたという史実による。ハディージャは、交易に携わっていた有能な商人・女社長であり、預言者は彼女に雇われていた。ハディージャはムハンマドが非常に有能で正直な人柄であるのを見て、彼女の方から求婚したといわれている。預言者の妻を持ちだされては、保守派も旗色が悪い。女性はこれをイスラムの伝統だとして、ビジネスへのさらなる参画、そのための教育・訓練、就業機会の拡大を求めている。各地の商工会議所では女性部会が設けられ、女性のビジネスを後押ししているだけでなく、役

員の選挙についても女性の参加（選挙権，被選挙権とも）が認められている。女性会員が少ないため女性が役員に当選することは難しいが，政府（商工省）は，その任命権を使い女性の役員を誕生させている。これは政府の女性の社会参画に対する積極的な姿勢を示すものであり，他分野にこの動きが順次拡大することが見込まれる。ちなみに，ごく最近，12月7日には，女性がジェッダ商工会議所の副会頭に選任された。

有能なサウジ女性と就業機会

現在では払拭されたが，我が国でもかつて，女性が高度の教育を受け職業に就くことをよしとしない空気が存在した。サウジでは近年まで同様の考え方が強かった。しかし現在のサウジは，家族に教育を身につけ職に就く女性がいることをプラスに捉えるようになってきている。高等教育を受け専門的な職に就いたり，起業するようなケースではとくにそれが強い。考え方が180度変わったのである。今やサウジでは教育レベルは男性よりも女性のほうが高い。大学やカレッジの段階では，学生の58%が女子である。サウジ国内の大学の博士号の79%は女子学生に授与されている。現在ではサウジ人の医師の40%が女性である。

にもかかわらず 実際には 女性はその能力にふさわしい職に就く機会は，男性と比べ限られている。たとえば，女性弁護士は最近ようやく法廷に立つことが認められる運びになったばかりである（まだ正式な決定はなされていない）。

そのためか，サウジ女性は社会と文化についての改革に関心が高い。教育の充実，就業機会の増加，家族のあり方，オープンな議論の許容など本質的な進歩につながる改革を求めている。

サウジ女性の変化

サウジでは，イスラム法に基づき，女性は，結婚前は父親か男性親族の庇護下にあり，結婚

後は夫に服従することで被扶養権を得て暮らす存在となるとされている。しかし，2008年から，その庇護者の同意なしでも女性にもイカマと呼ばれるIDカード，身分証明書が発給されるようになった。

本年10月にリヤドの政府機関を訪問した際には，女性職員が会議に男性職員とは離れた位置ながら髪も顔も覆わず同席していた。また驚いたことに帰国時のリヤド空港で，偶然その女性職員と出会った際には，先方がこちらに気づいて手を振り握手を求めてきた。オフィスや個人住宅内ではなくパブリックな場所でのことだけに，サウジの大きな変化が感じられた。

9・11以降の教条主義的勢力との訣別

サウジ政府がイスラム保守派との距離をとり始めたのは，2001年の9・11同時多発テロ以降である。それまでは前に見たように，政府は体制維持を目的として，久しくイスラム保守派を重用してきた。これが教条的・原理主義的な思想，過激思想をはぐくみ，テロリストを生む結果を招いた。過激派はサウド王家に敵対するようになった。危険を感じた政府はイスラム学者のうち教条主義的な勢力と手を切り，宗教改革，社会改革に舵を切った。それにより，イスラム保守派に抑えられていた女性の社会進出の扉が，再び開き始めた。

アブダッラー国王による改革の加速と女性の地位

2005年にアブダッラー国王が即位してからは，改革が加速化され，女性の社会的な地位も大きく改善された。同国王の即位後の最初のメディアとのインタビューの相手は，米国の女性ジャーナリストが選ばれた。そのインタビューの中で，同国王は，「自分の母親も，妻も娘も女性である」と述べて女性を軽視することはないと強調している。本年9月に開学した国王の名を冠したアブダッラー国王科学技術大学が，サウ

ジで初めての男女共学であることは、同国王の女性の地位に対する姿勢を明確に表している。

なお、サウジは、家父長制度の考えが色濃く残っている父系社会であるが、家庭では母子の絆が非常に強い。外見的には父系社会であるが、内実では母親を中心とした社会である。つまり、女性の発言力が強い。このことは、サウド王家のプリンスの間の関係を論じる際に、母親が同一であるか、同腹か否かが大きなポイントとして取り上げられることでもわかる。

社会の変化は不可避・不可逆

今やサウジはおよそ700万人の外国人出稼ぎ労働者を含め約2,800万人の人口を抱え、その80%以上は都市部に居住している。かつてのように沙漠での遊牧生活をおくるものは極めて少なくなっている。その上、衛星テレビやインターネットの普及で世界中の情報が、瞬時に手に入る環境にある。ほとんどの国民が携帯電話を手に入れている。もちろん、社会全体は、世界の他の地域と比べて保守的であることは否めない。しかし、情報化した中で、社会が保守的なままでいられるはずがない。ただし急激な変化は時として軋轢を生み、不安定さをもたらす。これをどうマネージしていくかは指導層にとって困難で大きな課題である。

女性のビジネスと社会進出

先述のように、男女の社会的な空間が分離しているサウジでは、女性の世界では女性のために働く女性が必要となる。女性患者を診察する医師、女学校の教師、女性顧客に対応する銀行・証券の金融関連の職などに、多くの高学歴のサウジ女性がその専門性を活かして就いている。また最近ではジェッダ郊外に女性専用の工業団地がつけられ、そこでは女性のエンジニアが働き始めている。ビジネスの分野でも、多くのサウジ女性が起業している。ファミリー・ビジネ

スを女性が引き継いでいる例も多い。

海外留学組を含め高学歴のサウジ人女性は、東南アジアなど外国からの女性の出稼ぎ労働者を家事労働や育児のために雇い、結婚や出産後も仕事を続けることが多いため、その数はますます増える方向にある。

サウジ政府は、男女、職種を問わず労働力のサウジ人化（サウダイゼーション）政策を推進している。専門性を求められる職種に限らず、中間職や単純労働に就業するサウジ人女性をいかに増加させるかが今後の課題である。

女性マーケット

サウジをマーケットとして見た場合も女性は無視できない。サウジでは男性市場と女性市場が明確に分かれていることが大きな特徴である。分かれているからこそ、女性市場にも注目すべきである。加えて、サウジ女性の物資や商品あるいはサービスの購入に当たっての発言力は、女性向け、女性企業向けの場合だけではなく、家庭用の商品やサービスの購入に際しても大きく発揮される例が多い。さらに言えば、サウジ女性の我が国及び我が国製品に対する評価は非常に高い。これを見過ごすことはない。ただサウジの女性の世界では、我が国の側も女性である必要がある。これに着目した我が国の女性実業家は慧眼の持ち主である。

再び——人口の半分は女性

このようにサウジ社会における女性の存在は大きい。これまでのアプローチでは見えなかっただけである。しかもそれは改革の進行とともにますます大きくなる。社会が情報化した現在では、かつてのように後戻りすることはない。サウジ社会を見る際には、これまでのように女性の存在を無視、軽視することなく、新しい視点で考えていくべきである。まさにサウジでも人口の半分は女性である。